

平成28年度 プロジェクト研究所業績報告書（中間報告）	
プロジェクト名	日本・フィリピン学生交流と異文化理解プロジェクト
研究所名	異文化理解プロジェクト研究所（所長 人間社会学科 阿佐美 敦子 准教授）
設置開始	2014.4.1
設置終了	2018.3.31
<p>■研究の進捗状況（研究員の活動実績含む）</p> <p>2016年度においては、10月にヴィサヤ大学学生5名と本学学生13名の交流が開始され、12月に第二回のセッションを、また2月には実際にヴィサヤ大学を訪問し、発表および親善交流が実現したが、参加学生がその準備に熱意を持って取り組んだ結果、大成功となった。“Collaboration is the key to success in the future”と題した交流会は、双方の学生によるプレゼンはどれも創意工夫に溢れたもので、英語力の不足を補う様々なビジュアル表現、音楽の効果的使用、言葉での説明だけでなく日本ならではの品物を実際に見せる、使ってみる、味見する、遊びを実演するといった様々に創造力豊かな発表ばかりであった。フィリピンでも大人気のアニメを共に楽しみ、大いに喜ばれた。他方では、相手の発表の際は上手な聞き手となる努力を惜しまない態度が見られた。相手の話を聞き、積極的に理解しようとしている態度、すなわちアクティブ・リスニングによって、ヴィサヤ大学学生は本学学生に非常な好感を抱いたことがポスト・セッション・エッセイから明らかとなった。彼らから「ここフィリピンでの出会いは最高でした」「これは私が経験した最高の異文化交流でした」「このプロジェクトの一員に選ばれたことをとても誇りに思っています」「今回の体験、生まれた絆は何物にも勝るものです」「実践女子大学の先生方、学生たちと過ごした体験は驚くほど素晴らしく、言葉で表現するのが難しいほどです」等々の言葉を得た。本学の参加学生もそれぞれに大変貴重な体験ができたことの喜び、フィリピンの先生方、学生の優しさ、気遣い、歓迎を心から感謝する言葉が寄せられた。</p> <p>■現在までの達成度</p> <p>本研究の効果を測定するメソッドとして、セルフ・アセスメントとプレ・セッション・エッセイ、ポスト・セッション・エッセイを採用している。フィリピン理解について、また英語表現力について、CAN-DO Statement(～ができる、～で表せる能力記述)にセッション前後、回答し、またセッション前、各セッション後にエッセイを書いてもらい、さらに各セッション後にヒヤリングを行っている。それによれば、学生たちの強い自己肯定感が測れる。プレゼンに必要なスキルとして、魅力的な企画であるか、上手に視覚化できているか、積極的にかかわれているか、説得力はあるか、理解はできているか、構成は適切か等々の要素があるが、学生たちの自己評価はすこぶる高く、交流が着実に成果を残す場となっている。</p> <p>■次年度以降の研究（見込み）</p> <p>2014年度の参加学生たちのヒアリングから、彼らの歴史的知識の欠如が明白となり、歴史認識の養成が次年度以降の大きな課題となった反省から、2015年度ではヴィサヤ大学のプレゼン時にフィリピン人の高齢男性2名に日本の占領時代についてインタビューするという画期的な試みを行った。SKYPEを通してではあるが、直に自分たちに向けてなされる発話に、本学学生たちも胸を打たれるものがあったと言うが、それでもほんの僅かの知識に過ぎず、2016年度ではNHK製作の番組「悲しみと救しのフィリピン」を皆で視聴し、全員が加害の事実についてまったくの無知であったことを認識し、なぜ無知なのか、いかに学ぶべきかを議論した。</p> <p>これを踏まえ、次年度に於いてはさらにこの点を焦点の一つとして学ぶ機会を設け、近代史の知識</p>	

をいかに養成できるかをさらに進めて研究していく。

■ 研究活動における成果

(1) 研究成果(雑誌、学会発表、図書等)

第 31 回異文化コミュニケーション学会年次大会においては、「多文化共生社会への構築に向けて: アクティブ・ラーニングと異文化コミュニケーション能力」のテーマのもと、主に参加学生の歴史認識の不足を取り上げ、今後のカルチャラル・リテラシー獲得の方策について何が可能か、可能でないかを発表し、こちらも多くの関心の声を得た。日本人を戦争の加害者と認識している東・東南アジアの若者の対日観を知ることは、今後、本当の共生を実現させるために不可欠であるが、日本の若者にそれをイメージさせることが大切である。「知らない」を克服するための方策について、意見が交わされた。

(2) 学生・生徒の教育及び支援に関する還元

カルチャラル・リテラシーの獲得と共に、本研究における検証の重要部分として、英語の発音が挙げられる。これまでのセッションを通して、いかに英語の発音が間違っているか、アクセントがなく平板な発音であるか、正確なリズム、イントネーションに欠けているか等が明らかになった。そもそも中高時代より正確な発音を適切に教わったことはなく、さらには英語らしい発音をすること自体が恥ずかしい、周りの生徒に笑われることが嫌だという文化がある。セッションに向けて一人一人、発音のチェックを行い、必要な指導を施し、訓練しているが、これはこれからの学生たちの英語運用上、極めて有用である。